W-3-1 日琉祖語の韻律体系再建に向けて　―今後の課題―

松森　晶子（日本女子大学）

要旨　琉球語プロソディーの通時的研究は、今あらたな局面を迎えている。とりわけ宮古諸島において、琉球祖語（以下 pR と表記する）の 3 種の型の区別を保持していると考えられる体系が次々発見されており（五十嵐ほか 2012、松森 2013, 2015 等）、現在それらの体系の仕組み解明が急ピッチで進行中である（青井 2016, 2017, 2018、五十嵐 2015, 2016a,b、セリック・青井 2021, 2022、松森 2014 等）。松森 (2017, 2022) では pR の 3 種の韻律型（以下 A, B, C 系列と呼ぶ）に LLH, LHL, HLL という語声調を再建し、pR は一種の声調言語であったという仮説を提示した。本発表では祖語の韻律体系についての仮説を評価するいくつかの視点を提示するとともに、pR 再建を目標に据えた日琉語プロソディーの記述研究が、今後どのような課題に取り組むべきか考える。

1.　琉球語のプロソディー研究：南琉球での新展開

従来の記述研究では、宮古諸島には一型の（あるいは型の区別の不明瞭な）韻律体系が分布するとされてきた。それは本土諸方言で行われてきた手法（語の単独形およびそれに助詞を付加した形で音調型を観察する方法）によって、体系内の型の対立のすべてが観察できると見なされていたためである。しかしこの伝統的な手法は、宮古諸島ではうまく機能しない。それを典型的に示すのが、次の宮古島の与那覇（よなは）方言の例である。(1) の名詞はすべて同じ音調型で出現していることが分かる。（以下 ‘[’ はピッチ上昇の位置、‘]’ はピッチ下降の位置、M は成節的両唇鼻音、I は中舌母音を示す。なお … は他の文節が後続することを意味する。）

(1)　宮古島与那覇方言の韻律型　（juzza：比格、mee：累加、du：焦点）

A　kaa [juzza] …（井戸より…）　B　Mtsu [juzza] …（味噌より…）　C　funi [juzza] …（舟より…）
A　midzI [meedu] …（水も…）　B　sIma [meedu] …（島も…）　C　funi [meedu] …（舟も…）

しかしこの方言では、同じ助詞を後続させると、3 拍名詞には明瞭な 2 つの型の区別（AB 対 C）が現れる。

(2)　宮古島与那覇方言の韻律型

A　nakadza [juzza] …（台所より…）B　avva　[juzza] …（油より…）　C　[maasu] juzza …（塩より…）
A　kuusu [meedu] …（唐辛子も…）B　kagaM [meedu] …（鏡も…）　C　[maasu] meedu …（塩も…）

ところがこの方言は、実は 3 つの型の対立を持っている（松森 2013）。これは次のような句の中ではっきりと確認できる。

(3)　宮古島与那覇方言の 3 種類の韻律型　（Nkee：向格）

A　mizI　gami　[juzza]…　（水甕より…）	A　kaa　nu　naka N　[keedu] …　（井戸の中に…）
B　M [tsu　gami]　juzza …　（味噌甕より…）	B　jaa　nu　[naka N]　keedu …　（家の中に…）
C　[maasu]　gami　juzza …　（塩甕より…）	C　[funi nu]　naka N　keedu…　（舟の中に…）

この方言では、「$(\text{mizI})_{\omega}$ $(\text{gami})_{\omega}$ $(\text{juzza})_{\omega}$（水甕より）」のように（以下、韻律語を ω 記号で示すことがある）、文節あるいは韻律句の内部に 3 つ以上の「韻律語」を連続させたときに、3 種の型の対立がはじめて明瞭に出現する。このような手法を採りながら 3 つの型を認定し、それぞれの型に所属する語彙を

検討すると、北琉球の諸方言のデータに基づいて想定されてきた各系列の所属語彙（「系列別語彙」: 松森 2012 参照）にも、きれいな対応を見せる。したがってこの宮古諸島の 3 種の韻律型の区別は、pR から引き継いだものであることが分かる。

さて次の与那覇方言の例が典型的に示すように、宮古島の諸方言では A 系列の語（水）から開始する文節では 3 つ目、B 系列の語（味噌）は 2 つ目、C 系列の語（塩）は 1 つ目の韻律語に H 音調が現れる（以下、高い音調を H、低い音調を L と示す）。なおこの方言では H 音調は 3 拍の長さで実現する。

(4)　宮古島与那覇方言の 3 種類の韻律型

A	mizI	gami	nu	[naka N]	keedu…	（水甕の中に…）
B	Mtsu	[gami	nu]	naka N	keedu…	（味噌甕の中に…）
C	[maasu]	gami	nu	naka N	keedu …	（塩甕の中に…）

また松森（2015, 2016）は、この「韻律語」という韻律単位を使用することによって（小浜島・西表島・黒島など）八重山諸島のいくつかの方言においても 3 種（以上）の型が区別されていることを示した。例えば次の八重山語の黒島方言では、その型の合流の仕方から、3 つの型の区別があることが確認できる（F は両唇摩擦音を示す）。

(5)　八重山諸島黒島方言の韻律型　（nudu：主格＋焦点、nu：属格、ha：向格）

A　Fu [cji　nudu …（口が…）　B　ja [ma nu] du …（山が…）　C　Fu [ni nu] du…（舟が…）

A　Fu [cji nu] naha hadu …（口の中に…）　B　ja [ma nu] naha hadu …（山の中に…）

C　Fu [ni] nu naha hadu…（舟の中に…）

松森（2017，2022）は宮古諸島と八重山諸島の方言が分岐する前の段階（南琉球祖語の段階）で、すでに「韻律語」が、その祖体系のプロミネンスの位置を算出するための単位として機能していたと提案した。

2.　琉球祖体系の仮説

以上のような観察と、北琉球の三型アクセント体系の記述結果に基づいて松森（2017，2022）は、pR の韻律体系に、次のような 3 種類の型が区別される「語声調」体系を再建した。

(6)　琉球祖語（pR）における 3 種類の声調

A 系列　*LLH　　B 系列　*LHL　　C 系列　*HLL

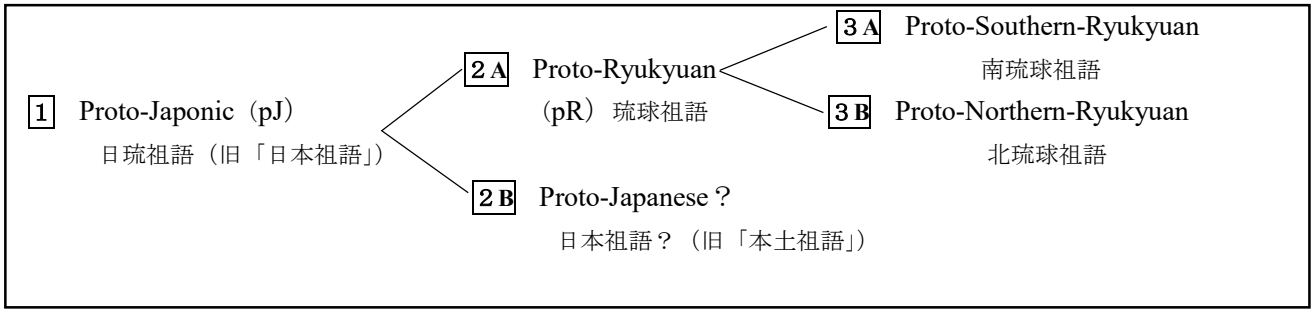
また松森（2022）は、南琉球祖語（宮古諸島と八重山諸島が分派する前の体系）の段階で、*LLH、*LHL、*HLL といった pR の H 音調や L 音調を担う単位（TBU）が、次のように音節から韻律語へと入れ替わった、という仮説も提示している（以下、音節を σ 記号で示すことがある）。

(7)　琉球祖語（pR）から南琉球祖語への TBU の入れ替え（松森　2017, 2022）

*σ　（琉球祖語 pR）　＞　*ω（南琉球祖語）

すなわち「韻律語」と呼ばれる韻律上の単位は、pR の段階からその体系のプロミネンス位置の算出に関わっていたのではなく、そこから分派した諸体系の下位区分（すなわち「南琉球祖語」: 次の (8) に示した 3A の段階）において、音節に取って代わるような形であらたに出現した、とする仮説である。

(8)　日琉祖語　（pJ）　から現代諸方言の韻律体系に至る過程についての仮説



これに対し、（奄美・沖縄の）北琉球祖語に「韻律語」を想定しなければならない証拠は（今のところ）見つかっていない。以下は北琉球の三型体系の代表として、沖縄本島中部の金武（きん）方言のアクセント体系を示す。

(9)　沖縄本島金武方言の 3 種類の韻律型（kara：奪格）（ 。は「言い切り形」であることを示す）

A	[kazji （風）	[kazji ka]ra。	A	[kibusji （煙）	[kibusji] kara。
B	[jaa]ma[a（山）	[jaa]maa[kara。～[jaama]ka[ra。	B	[kuju]mi[i (暦）	[kuju]mii[kara。～[kujumi]ka[ra。
C	tii[da (太陽）	[ti]ida [kara。	C	gara[sa （烏）	garasa [kara。

(9) の A 系列の [kazji ka]ra。や [kibusji] kara。に見られる語頭から 3 つ目の拍にかけて出現する H 音調は、祖語の段階から存在していたものではなく、通時的に見て新しく生じたものである。この H 音調は、次のように「語頭隆起」によって文節の初めに生じた H 音調が、「同化の法則」によって後ろに（右方向に）ずれていった結果、最終的に 3 拍目までに実現することになったものと考えられる。（注：以下、祖型から現代の音調型への変化過程を提示する際には主に韻律上の変化を示し、各語の祖形の音形（とその変化形）についてはあえて厳密な形を示さない。各語の祖形、および変化の途中段階の音形については別途議論が必要だからである。）

(10)　* [ki]busji kara　＞　* [kibu]sji kara　＞　[kibusji] kara

これに対し (9) の B 系列の　[kuju]mi[i （暦）の語末音節の mi[i や、C 系列の gara[sa（烏）　の語末音節 [sa に出現する H 音調は、pR に存在した H 音調の痕跡である可能性が高い。B 系列と C 系列の型の対立が残されている北琉球の体系では、B 系列の H 音調の山のほうが C 系列のそれよりも後ろに（右に）出現する。このことは pR では、B 系列のほうが C 系列より 1 韻律単位分、後ろ（右）にプロミネンスがあったことを示唆している。

3.　祖体系の仮説をどう評価するか

ところで、pR に限らずある祖体系について提示された（今後も提示され得る）仮説は、次の (11) に挙げられたいくつかの異なる観点から、その妥当性を評価される必要がある。

(11)　祖体系の仮説の評価基準

a.　体系の整合性（均整のとれた体系を成しているか。）
b.　祖体系から分派した言語体系内部の型の合流の仕方を的確に説明できるか。
c.　祖体系から現代の諸体系に至るまでに各音調型に想定される変化が自然なものか。
d.　韻律体系全体を考慮に入れた変化過程（連鎖的変化のプロセス）の観点から見て妥当か。

さて、(6) に示したような 3 種の語声調を前提に松森（2022）が再建したのは、次のような祖体系である。（なお 2 音節名詞については、それらに 1 音節の助詞を付けた場合の再建型を示してある。それらを単独で言い切った場合の音調型は、現時点では正確に推理するための手がかりがないため、ここではあえて示していない。）

(12)　琉球祖語（pR）の韻律体系（松森 2022）　（$\overline{\sigma}$は当該の音節が高いことを示す。）

	2 音節名詞（助詞付き言い切り形）	3 音節名詞（単独言い切り形）
A 系列（*LLH）	*σ σ $\overline{\sigma}$	*σ σ $\overline{\sigma}$
B 系列（*LHL）	*σ $\overline{\sigma}$ σ	*σ $\overline{\sigma}$ σ
C 系列 (*HLL)	*$\overline{\sigma}$ σ σ	*$\overline{\sigma}$ σ σ

まず (11a) の観点であるが、(12) の pR の体系は各型の H 音調がそれぞれ 3 つ目、2 つ目、1 つ目の音節に出現するという、整合性のある体系を成している。また (11b) の観点から見ても、(12) の体系は説明力がある。この体系では、それぞれ H 音調が隣接した箇所に存在する A 系列と B 系列の型が合流しやすく、B 系列と C 系列が合流しやすいこと（それに対して A 系列と C 系列は合流しにくいこと）を予測する。これまでの琉球語の記述研究では、現代の多くの二型アクセント体系のほとんどが AB 対 C、あるいは A 対 BC のような型の合流を遂げているという事実が明らかにされているが、(12) の体系はこの事実をも的確にとらえることができる。

さて (12) の pR の祖体系の私案に対し、上野 (2018) は次のような祖体系を pR に再建した。

(13)　琉球祖語（pR）の韻律体系　（上野　2018: 106 ）

A	*[○! :	*[○!○	*[○○!○	（！は下降式に伴う半下降）
B	*○[:	*○[○	*○○[○	
C		*[[○]○	*○[○]○	（ [[は拍内上昇）

この (13) の体系が、(11) に示した評価基準にどのように答えられるかは今後の課題であるが、(12) に示した松森説と、(13) に示した上野説のもっとも大きな相違点は、(11c) ―すなわち祖体系から現代の諸体系に至るまでに各音調型に想定される変化の自然さ―に関わるものである。具体的に言えば両者は、(13) のA系列に再建されている「下降式」の発生に関する見方について大きな違いを見せる。上野 (2018) は（pRのA系列のみならず日琉祖語の祖形にも）下降式を再建し、琉球諸語のA系列には例えば次のような変化過程を想定する。

(14)　上野説　　[○○] ○　　＜　　*[○○！○（下降式）　　＞　　[○○○

これに対し松森（2022）は、「下降式」を通過点と見る。たとえば沖永良部島の正名（まさな）方言では A 系列に対応する現代の型に HHH という高い平板の音調型（例： [hagama 羽釜）が現れるが、これは pR の A 系列の音調型（*LLH）から次のような過程を経て、現代の型へ変化を遂げたと考えるのである。

(15)　松森説　　*haga[ma]（pRの段階）　＞　*[ha]ga[ma　＞　*haga↓ma　＞　[hagama（現代）

さて本発表でもっとも力点を置きたいのは、(11d) に示した評価の基準である。祖語の韻律体系再建にあたっては、その祖体系から現代の諸体系に至る変化の過程において、体系内の各型どうしが緊密に

連動しながら変化するという連鎖変化 (chain shift) を想定しなければならない。本発表ではこれを次のように提示する。

(16)　連鎖的変化 (chain shift) の原則：
　　体系内の韻律型は、他の型と緊密に連動しながら変化を遂げる。

たとえばグリムの法則や英語の大母音推移に代表される連鎖的変化は、内部の各要素が緊密に結びついた体系を成しているからこそ起こり得るものである。韻律体系の変化は、まさに「緊密に結びついた要素から成る体系」に生じる変化の代表とも言える。そのことを前提に松森 (2022) では、現代の北琉球の三型アクセント体系である金武方言と正名方言の体系において、pR の A、B、C の各系列の型の変化が一段階ごとに連動しながら、順を追って体系全体を変化させていくプロセスを示した。以下は、金武方言のものである。

(17)　現代の金武方言の体系への変化過程　（松森 2022）　（kibusji 煙、hasamii 鋏、ʔutuge 下顎）

	a 段階（pR）	＞	b 段階	＞	c 段階	＞	d 段階	＞	現代
[A系列]	*kibu[si]		*kibusi[		*[ki]busi		*[kibu]si		[kibusji]
[B系列]	*ha[sa]mi		*hasa[mi		*hasami[i		*[ha]sami[i		[hasa]mi[i
[C系列]	*[u]tuge		*u[tu]ge		*utu[ge		*utu[ge		[ʔu]tu[ge

ここでは体系内の一つの型が特定の変化を遂げると、それと同じ特徴を共有する型も同様な変化を遂げている。したがって、（他の型があまり変化していないのに）体系内の一つの型だけが大幅な変化を遂げることもないし、また（他の型が変化しているのに）体系内の一つの型だけがほとんど変化しないということもない。

上野 (2018) の祖体系 (13) の問題点は、A 系列の祖型に pR（ひいては日琉祖語 pJ）の段階からすでに下降式（*[○○！○）を建てていることにある。この仮説によれば日琉祖語の段階から現代に至るまで、（他の型が連綿と変化を遂げていくなか）A 系列の型だけが長い期間ほとんど変化を遂げないで現代に至ったというような、不自然な変化（不変化？）の過程を想定しなくてはならなくなってしまう。

4.　日琉祖語の韻律体系再建に向けて—今後の課題

さて、日琉祖語の韻律体系再建の将来に向けて今後われわれが取り組むべき課題の一つは、前節の最後に述べた「下降式」に関連したものである。私は、下降式は 2 つの H 音調の山を持つ HLH のような音調型から一種の「ダウンステップ」によって生じたという考えを、松森 (1993) から一貫して採用している。このようなプロセスによってあらたに中音調が（通時的にも）生じる可能性があることは、Bybee (2015：67-68) の記述にもある。そこで今後は、日琉諸語のいわゆる「重起伏」の音調型（HLH のように文節内に 2 つの H 音調を持つ型）が観察される体系に焦点を当てて、その型がたどる通時的、共時的変化についての詳細な記述が求められる。

また今後は特に、八重山諸島の韻律体系の記述研究が重点的に推進されなければならないだろう。八重山諸島については麻生・小川（2016）が三型アクセント体系を発見し、先鞭をつけてはいるが、(5) の黒島方言で示したように pR から引き継いだ 3 種の型の対立が保持されている体系が、次々に発見される可能性も十分ある。一例として西表島の古見（こみ）方言の体系を以下に挙げる。この方言を代表とする現代の八重山諸島の一部の体系では、最初の韻律語内で 3 つの型が明瞭に区別できるような体系が（新たに？）生じた可能性がある。

(18)　西表島古見方言の 3 種類の韻律型

A	[mjaa] ku	muni	nudu …	（宮古言葉が…）	A	[pate] ruma	pitu	nu…	（波照間人が…）
B	jamatu	muni	nudu …	（大和言葉が…）	B	ukinaa	pitu	nu…	（沖縄人が…）
C	[tarama]	muni	nudu …	（多良間言葉が…）	C	[takiduN]	pitu	nu…	（竹富人が…）

今後「韻律語」という単位を想定して調査を行えば、八重山諸島においても宮古諸島とは異なるタイプの、（pR の韻律型の対立の痕跡を現代に残す）3 種以上の型を持つ韻律体系の発見が成され、その結果 pR の韻律体系再建に向けての、より確固たる素地が築かれていくのではないかと思われる。

謝辞　本発表は JSPS 科研費 18K00588, 19H00530, 20H01259、および国立国語研究所共同プロジェクト「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」の研究成果の一部である。

参照文献

セリック，ケナン・青井隼人（2021）「多良間方言の韻律構造の解明に向けて—動詞進行融合形の音調の記述とその分析—」『国立国語研究所論集』 21： 133–162.

セリック，ケナン・青井隼人（2022）「南琉球宮古語多良間方言における『名詞＋動詞』構造の複合名詞アクセント」窪薗晴夫・守本真帆（編）『プロソディー研究の新展開』 開拓社　236-257.

青井隼人（2016）「南琉球宮古多良間方言の三型アクセント—その特徴と型の中和—」『音声研究』 20(3)： 76–81.

青井隼人（2017）「南琉球宮古多良間方言における 2 種類のアクセント型の中和」『国立国語研究所論集』 13：1–23.

青井隼人（2018）「南琉球宮古多良間方言におけるピッチ上昇—複数の韻律句が連続する場合のピッチパターンの記述—」『国立国語研究所論集』 14： 1–27.

麻生玲子・小川晋史（2016）「南琉球八重山語波照間方言の三型アクセント」『言語研究』 150： 87–115.

五十嵐陽介（2015）「南琉球宮古語多良間方言のアクセント型の記述」『比較日本文化学研究』1-42. 広島大学大学院文学研究科総合人間学講座

五十嵐陽介（2016a）「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」『言語研究』 150： 33–57.

五十嵐陽介（2016b）「名詞の意味が関わるアクセントの合流—南琉球宮古語池間方言の事例—」『音声研究』 20(3)： 46-65.

五十嵐陽介・田窪行則・林由華・ペラール トマ・久保智之（2012）「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』 16(1)： 134-148.

上野善道 (2018) 「これまでの琉球方言アクセント研究とこれから」『國學院雑誌』 119（11）： 97–108.

窪薗晴夫・守本真帆（編）（2022） 『プロソディー研究の新展開』 開拓社.

松森晶子（1993） 「日本語アクセントの祖体系再建の試み—いわゆる『下降式アクセント』の成立に関する考察をもとにして—」『言語研究』103： 37-91.

松森晶子（2012）「琉球調査用 『系列別語彙』 の素案」 『音声研究』 16(1)： 30-40.

松森晶子（2013）「宮古島における３型アクセント体系の発見 —与那覇方言の場合—」 『国立国語研究所論集』 6： 67-92.

松森晶子（2014）「多良間島のアクセント規則を再検討する」 『日本女子大学紀要 文学部』 63： 13-36.

松森晶子（2015）「南琉球の三型アクセント体系 —その韻律単位に関する考察—」 『日本女子大学紀要　文学部』 64： 55-92.

松森晶子（2016）「八重山諸島黒島方言アクセントの仕組み —その韻律範疇 PWd と下がり目の出現条件—」『言語研究』 150： 59-85.

松森晶子（2017）「北琉球における C 系列 2 音節名詞の語頭音節の長音化—その原因について考える」 『日本語の研究』 13（１）: 1-17.

松森晶子（2022）「琉球祖語の韻律体系について」 窪薗晴夫・守本真帆 （編）『プロソディー研究の新展開』 開拓社 191-213.

Bybee, Joan (2015). *Language Change.* Cambridge University Press.